

# 311 東日本大震災から 10 年 日台関係を再考する

— 日本台湾交流協会・谷崎泰明理事長 ×  
駐日台北経済文化代表事務所・謝長廷代表 特別対談 —

2011年3月の東日本大震災から今年で10年の節目を迎えます。当協会ではこのたび駐日台北経済文化代表事務所・謝長廷代表をお招きし、当協会・谷崎泰明理事長とともにこの10年間の日台交流を振り返るべく、特別対談を実施いたしました。

## 東日本大震災を経て強化された日台関係

**谷崎：**今月で東日本大震災（以下311）から10年ということで、最初にそのお話をさせていただきます。10年前、台湾の方々や台湾当局から日本に250億円という大変な額の義援金をいただいたこともさることながら、医療チームや心温まるメッセージも送っていただきました。このことに我々は非常に感激し、また台湾という力強い隣人がいることを知って強く励まされました。10年前のその思いを日本人は忘れていません。その後も熊本で大きな地震がありましたが、その際にも台湾の方々、そして蔡英文総統から温かいメッセージをいただいたのは、日本にとって大変心強い限りでした。2011年というのはとても悲しい出来事の年でありましたが、日本と台湾の関係において画期的な「転機」になった年だったと思います。311以前から日本と台湾の関係は良好でしたけれども、ここで大きく飛躍したと思います。

**謝：**おっしゃるとおりです。そもそも台湾と日本は、自由や民主といった普遍的価値観を共有しています。また古くから民間の人々の仲が良く、交流も密接でした。特に先ほど谷崎理事長がおっしゃったように、災害があればお互いに助け合ってきました。私はこれを「善の循環」と呼んでいますが、これは実は20年前の台湾の921大地震（台湾中部大地震）の時から続いている流れです。921大地震の際には、日本から救援隊や仮設住宅

を支援いただきました。2009年の八八水害（2009年台風8号災害）の時もそうです。こうした流れがある中で、なぜ311で台湾がこれほどまでに多くの義援金を送ったのかというのは、台湾の人々が日本のことを我が事のように思っていたから、というのが大きいと思います。当時私は台湾にいましたが、台湾の多くの人々はテレビで311の被害を知り、日本の経済等様々なものが後退するかもしれないと思いました。そして、台湾の多くの人と同じように、私自身も募金箱を持って街で義援金を募りました。また、当時私は主席を代理して、民進党の会議と記者会見を開き、政党募金を含め、約8540万台湾元（2億4000万円）の義援金を日本に送りしました。

**谷崎：**日本に心を寄せてくださった台湾の皆さんに改めて感謝を申し上げたいと思います。世論調査によると、311以前の2009年には「台湾を身近に感じる」と回答した日本人は約56%<sup>1</sup>でしたが、2020年の調査では、「台湾に親しみを感じる」と回答した日本人は77.6%<sup>2</sup>と、この10年間で20%も上がっています。また、当協会の最新の調査でも台湾の方々の70%が日本に対して親しみを感じているという結果が出ています。このような日台間の親近感の高さは、日台関係の基礎になっていると思います。

1 駐日台北経済文化代表事務所による2009年の調査。

2 駐日台北経済文化代表事務所による2020年の調査。

謝：そうですね。日本を思う台湾の人々の行動をきっかけに、日台友情への感情が深まったのだと思います。それどころか、さらに一段階上のレベルにまで上がったのではないのでしょうか。その後も高雄ガス爆発(2014年7月)、台湾南部地震(2016年2月)、熊本地震(2016年4月)、花蓮地震(2018年2月)等様々な災害や事故がありました。コロナ禍も同じで、台湾と日本は相手に何かあった時、心配で居ても立ってもいられず支援するのです。ですから昨年4月に日本で医療物資の調達が困難だった時も、台湾は日本にマスクを寄贈しました。その時、マスクを受け取った特別支援学校の子供たちから御礼のメッセージをもらい、改めて台湾と日本は1つの家族だと実感しました。

谷崎：ありがとうございます。本年は311から10年ということで、当協会では台湾への感謝の気持ちを込めて「日台友情」をテーマに一連のイベントを企画・実施しています。先日も台北101でライトアップイベントを実施し、蔡総統からもメッセージをいただきました。ライトアップでは市民から寄せられた「台日之情永不滅(日台の友情は永久に変わらない)」等の友情を表すメッセージを映し出しました。311後の10年間の日台関係の盛り上がり、今日の具体的な日台友好の行事に結びついていることは、これから先の10年を考えるにあたって非常に重要なことだと思います。

謝：そうですね。先ほど谷崎理事長がおっしゃった約77%の日本の方が台湾に親しみを持っているというのはとても高いレベルです。日本の方々が台湾に対して思いを寄せてくださっているので、たとえコロナ禍にあっても、昨年李登輝先生

が逝去された際には当事務所に5日間で4000人以上の日本の方が弔問記帳に来ていただいたり、また難病にかかった高雄の子供のために尽力いただき日本で治療を受けさせていただいたりしました<sup>3</sup>。これらの事例に多くの台湾人が感動しました。他にもこういった民間交流の心温まるエピソードが日本と台湾の間には沢山あると思います。このような交流の流れが今後も続いていくことを期待しています。

谷崎：高雄のお子さんの件、間に合って本当に良かったです。こういった日台の互いを思い合う関係を基礎として、様々な場所で日台交流の芽が出てきていると思いますが、特に311後の大きな成果として、地方間での国際交流が増加したというのが挙げられると思います。これは謝代表も度々地方に行かれているというのが大変大きな貢献になっていますね。

謝：そうですね、私も地方交流は非常に重視しています。

谷崎：地方間交流発展の背景には、この10年間で飛躍的に発展した日台関係が土壌としてあったのだと思います。311以降、日台の自治体間の地方交流協定数は大幅に増加してきています。特に昨年、宮城県栗原市と南投市が姉妹都市提携を結びましたが、これは駐日台北経済文化代表事務所が「仲人」を務めたと聞いています。今後も謝代表に日台間の多くの「縁」を結んでいただければ幸いです。

謝：台湾側の統計によれば、日台間では132件<sup>4</sup>の友好交流協定や姉妹都市協定が締結されています。この数字は、日台間の地方自治体交流の緊密さを表すものだと思います。宮城県栗原市と南投市の姉妹都市協定以外にも、コロナ禍の中にお

3 2020年12月 当時日本は新型コロナウイルスの水際対策のために新規入国が制限されていたが、難病治療のため来日を希望した高雄の児童に対し、人道的配慮から査証の発給を行った。台湾外交部から当協会高雄事務所に対し事前に協議があり、迅速な査証発給手続きが可能となった。

4 駐日台北経済文化代表事務所による統計(地方議会や自治体の局レベルの友好交流覚書等を含む)。当協会では、地方自治体間での協定のみを調査しているため、公表している協定締結数は異なる。

いても、高雄市鼓山区と富山県氷見市がオンラインで友好交流都市協定を締結しました。今後、屏東県と鹿児島県、並びに高雄市と京都市との友好関係を進めていきたいと思えます。

**谷崎**：ただ、残念ながら解決していない問題ももちろんあります。福島県をはじめとする5県産食品の輸入規制の話です。これについて、謝代表は科学的に問題ないことが実証されているのであれば、その結果に基づいて処理すべきと仰っていたというのとは十分承知しています。ただ2018年の公民投票からもう2年になりますので、ここで解禁していただければまさに10年に相応しい日本に対するメッセージとなると思っています。この問題については改めて宜しくお願ひしたいと思えます。

## 2020年米大統領選を経た今後の東アジア国際関係

**谷崎**：次に政治の話題をお話ししましょう。昨年米国にバイデン政権が誕生しましたが、台湾と米国の関係を考えますと、トランプ政権期に米台関係というのはかなり進展したと思えます。大統領選後に台湾のオピニオンリーダーに話を聞いたところ、バイデン政権後の米国が中国とどう付き合うかというのは、トランプ政権期と比較すると若干心配だと述べていました。民主党政権というのはどちらかというと融和的な路線でありますし、バイデン政権誕生後、彼らは中国との関係において「競争」ではなく「競争の共存」という言葉を使ったりしています。「共存」ということはお互いを認め合ってやっていこうというわけですから、ニュアンスがトランプ政権とは異なるものです。さらに戦略的忍耐が必要だとも述べていることを考慮すると、バイデン政権が中国とどう付き合っていくのかというのは確かに心配な点です。他方で、プリンケン国務長官はトランプ政権期と基本的には変わらないスタンスを明確にしている

ところもあり、今後その政策を十分注視する必要がありますが、台湾はバイデン政権をどう考えているのでしょうか。ぜひ謝代表のお考えをお聞かせいただければと思えます。

**謝**：確かに谷崎理事長がおっしゃるように、大統領選前の台湾には、バイデン政権になった場合には、対台湾・対中国政策が変わるかもしれないという懸念がありました。しかし、先ほど台湾の蕭美琴駐米代表と電話をする機会があったのですが、話によれば基本的には米国のスタンスは変わらないとのこと。というのは、民主党も民主や人権を重視しており、ウイグル族や香港の問題等に対して、米国は中国をとて警戒しています。もちろん気候変動や環境問題に対しては、中国と話し合いの場を設けたり、協力したりするという動きもありますが、安全保障戦略分野においては、米国は中国を「最も重大な競争相手」だと言っています。また米国は民主主義国家ですが、米国の民意は人権問題や新型コロナに関して中国に反感を持っています。よって、米国政府がこれまでの政策を変更するのは難しいと思っています。

**谷崎**：なるほど。バイデン大統領は習近平主席と電話会談した際、台湾に言及して、台湾を含む地域におけるますます強圧的な中国の行動に対し、根本的な懸念を表明していました。これは明確なメッセージであり、米中関係の1つの大きな出発点だと感じました。

**謝**：中国の今の戦略は現状変更です。現在の状況は中国にとって不利であるため、まず力による現状変更をしようとしています。南シナ海に対してもしかりです。最近中国が台湾海峡周辺の水域や空域で頻繁に活動していますが、これは台湾だけの問題ではありません。もう1つの視点から見れば、沖縄、つまり日本や米国にも関係があります。

**谷崎**：その通りですね。日本と米国の関係を言えば、日米安全保障条約があり、両国は同盟関係です。ですから我々は、東アジアと近隣諸国の安全

を保つためにはこの日米安全保障条約をより精度の高いものにするということが大事だと考えています。それに加え、安全保障のネットワークとして日米豪印4か国による枠組み「クアッド(Quad: Quadrilateral Security Dialogue)」があり、現在協力が進められています。日本にとって中国との関係も大事ですが、中国が現在の国際情勢を力によって変更しようとするのは、やはり抑えなければならぬと考えています。

**謝:** 先ほども申し上げたとおり、米国の政策の大筋の方向は変更していないと考えています。もちろん米国はクアッドを重視していると思います。日本も自由で開かれたインド太平洋を大変重視していますから、クアッドのような枠組を歓迎していると思います。他方でインドは伝統的に他国と同盟を結ばない政策をとっていますからね。

**谷崎:** 今まで中国とインドの争いというのは国境のヒマラヤ辺りの紛争でした。しかしここ10年くらい、中国は中東やアフリカを念頭に置いて海洋進出してきています。これはインドにとっては大きな脅威でしょう。インド洋にあるアンダマン・ニコバル諸島は戦略的に極めて重要な海の要所ですが、ここは中国にとっては目の上のたんこぶのごとく邪魔な場所です。そこをインドは抑えています。中国は東シナ海、南シナ海、そしてインド洋と徐々に海洋影響力を強めようとしていますから、インドの危機感は以前より深刻になっているのは間違いないと思います。

**謝:** そういう見方もあります。ただインドにとって伝統的な中国との衝突は陸です。インド洋や太平洋の問題ではない。彼らが関心を持っているのはやはり国境、陸の問題だと思います。

### 日台協力で進める第三国市場展開

**谷崎:** 経済の話になりますが、第三国市場における日台企業間協力について、そもそも基本的には日台間の経済には高い補完性があると考えていま

す。Win-Winが可能ということです。これまでも第三国において日本と台湾がどのような協力ができるかについては、ずいぶん議論されてきました。当協会は今、日本企業がどういった分野で台湾と協力しているのか、これから協力可能な分野は何か等について調査をしていますが、日台ではかなり高い補完性があることから、協力の余地は非常にあるのではないかと考えています。

そういう中で2つ例を紹介しますと、まず1つ目は金属溶解に使用される「るつぼ」製造・販売メーカーの例です。このメーカーの「るつぼ」は非常に高品質なのですが、日本の市場だと狭すぎて十分に売れないのでこれをどうにか東南アジア等外国に持っていけないかと考えていたところ、たまたまお付き合いのあった台湾企業が、東南アジアには既に自分たちの商売上の関係があるので、この日本企業の製品を売ることができるのではないかと売り込み、結果成功したという話です。これはまさに日本と台湾が互いに持っていないところを補った、つまり日本企業にとっては台湾の強みであるチャンネルに乗って海外進出が可能に、台湾企業にとっては日本の製品を扱うことで事業が拡大した、という良い例だと思います。

それからもう1つは私自身が関係したことです。ベトナムにいた時の話です。ベトナムの首都は北のハノイですが、ハノイは内陸のため港がありません。よって、100キロほど離れたラクフェンというハイフォン港に比較的近い所に、日本がODAで大きな港を建設しました。ところが、航路としては奥まったところに位置しており、日本の船が十分に活用できず、港は作ったけれども採算が合うかどうかという懸念もありました。そこでエバーグリーンに共同運営会社に出資していただいた。これにより台湾へ郵送する貨物も港が使えるということになりました。謝代表もご存じのとおり、ベトナムと台湾は実は結構関係が深いですよね。ベトナムに対して、台湾企業はかなり投

資もしています。

**謝**：そうですね、台湾の中小企業もかなりベトナムに投資しています。

**谷崎**：台北・ハノイ間で直行便もありますね。そういうわけで、これはまさにインフラ案件を巡って、日台がフォローアップして協力していると好例だと思います。こうしたプラクティスはもっとあるのではないかと調べていますが、その調査を踏まえて新しい分野で日本と台湾が協力できないかというスタディを行い、まだ台湾企業とのビジネスをしたことがない企業を含め、より多くの日本企業に台湾と組むことのメリットをもっと知ってほしいと思っています。

**謝**：そういう例はたくさんあると思います。ただし、企業の秘密保持等のため、あまり広く知らされていないのです。台湾の TAITRA（台湾貿易センター）は現在、JETRO（日本貿易振興機構）とも協力し、日本、台湾、東南アジアで説明会や商談会を開催し、第三国市場で協力しようとしている台湾、日本企業間のビジネス・マッチングをサポートしています。TAITRA は、台日第三国市場協力のウェブサイトも設置していますので、日本企業はオンライン登録するだけで、TAITRA のマッチングサービスを無料で利用できるのです。また、TAITRA では、あまり知られていないが世界一の技術を持っている、そうした日本の中小企業を調査しています。私が知る限りでも若干の成功例があります。また、補完という意味では、例えば台湾の人件費が日本よりも安価であることがあります。日本が海外で競争する際、ライバルはヨーロッパや中国だと思いますが、価格が重要な要素の1つになるでしょう。鉄道産業を例に挙げると、車両を製造することは台湾でもある程度はできますが、革新技術はもちろん日本が持っています。日本の品質が良いことは皆知っていますが、コストの高さがネックとなっています。そこを台湾と補完すれば、競争力が生まれるので

はないかと思います。他にも AI や IOT、生物医療等の日本のハイテク技術が、台湾が優位性を持つ分野と提携できたらいいと思います。また、日本の技術、特に特許があるものを台湾に移転するというのは、リスク分散の意味もあるのではないかと考えています。

**谷崎**：それは非常に重要なポイントで、実は特許は競争になっています。日本の中小企業は技術の宝庫ですが、日本は十分にそれを活用できていない状況です。インドネシアの中華系最大財閥の1つにサリム・グループがありますが、2代目の当主はたびたび日本に来ています。来日して何をしているかという、日本の中小企業を訪ねて技術を売らないかと言っている。放っておくとすたれてしまう技術をインドネシアで活用しようとしているわけです。日本の中小企業は技術はあるのに後継者がおらず、放っておけば何年か先には閉鎖してしまう。宝の持ち腐れだと言えます。

**謝**：ほかには、台湾はグリーン電力と再生可能エネルギー産業の発展を推進しています。日本は太陽光発電や風力発電などの技術を持っています。今後そういった分野においても日本と一層協力できればと思います。

**谷崎**：日本は2050年までにカーボンニュートラルを達成すると表明しています。クリーンテクノロジーやクリーンエネルギーも相当増やしていかないといけない。そこで、太陽光発電を大いに活用する必要があると思っています。

## アフターコロナの日台経済協力とは

**谷崎**：ところで、今回の新型コロナ対応における台湾の防疫体制は素晴らしかったと思います。感染コントロールの仕方やIT技術を使ったマスクマップなど、台湾は素晴らしい技術を持っていると日本で改めて注目されました。したがって日本と台湾は既存の関係のみならず新しい分野でも経済的に協力可能な分野が多くあるのではないかと

思っています。そのうちの1つが、蔡総統が双十節のスピーチでも述べられたサプライチェーンの再編成です。現在、世界で大変動が起きていて、サプライチェーンの組み換えが行われているということを蔡総統は述べておられますが、本当にそのとおりです。半導体がたびたび話題になりますが、半導体のみならず、他の分野においても日台の経済にとってよりリスクの少ないWin-Winになるサプライチェーン関係が作れるのではないかと思います。

**謝：**そうですね。コロナ後のサプライチェーン再構築について、やはり非常に重要なことは、信頼できるサプライヤーを探すことだと思います。先月、バイデン大統領も半導体などの4品目サプライチェーン見直しを要求する大統領令に署名しました。台湾は日本や米国にとって、信頼できる責任あるパートナーになる自信があります。ですから、サプライチェーン再構築の際、台湾のことを視野に入れていただきたいと思います。半導体については最近、茨城県つくば市でTSMCの100%子会社を設立することが発表されました。これには米国もとても注目しています。最近、台湾は海外数か国から半導体の要請を受けており、台湾の経済部も国内の業者との話し合いを進めており、各国と協力していきたいという姿勢を示しています。

**谷崎：**サプライチェーンの他に、あと2つの分野でも協力できるのではないかと思います。1つは従来型の日本のブランドを活かすというものです。日本の製品は価格が高いという話もありましたが、多少高くとも、日本製品に対する信頼度はあるため、台湾ではまだまだ競争力があるのではないかと思います。もう1つはベンチャービジネスの分野です。ベンチャービジネスは日本ではリスクが高いものと見なされ、なかなかファイナンスが難しかったりするわけです。他方、台湾の経済界は中身が良ければ日本よりもベン

チャー企業とマッチングする可能性が高いのではないかと思います。日本でできない分野は台湾との間で補完性があるのではないかと思います。

**謝：**直近の過去5年間、台湾に進出する日本企業は大体が中小企業でした。今私が注目しているのは日本の保存食、長持ちの技術です。この技術はおそらく台湾にはありません。例えば保存食は救援や漁船等の場面で保存食が必要になるのです。

**谷崎：**その分野では日本が進んでいるのですか。

**謝：**はい、この技術について日本は進んでいると思います。例えば魚肉ソーセージ等は冷蔵せずとも2、3か月持ちますよね。保存食であれば5年間持ちます。こうした日本の細かい技術はたくさんあると思います。

**谷崎：**最後に、台北市日本工商会は、毎年台湾の行政院国家発展委員会に対して、政策提言と個別要望事項の2つからなる白書を提出しています。これは台湾がよりよいビジネス環境になることを願い、作成しているものです。日本企業にとってだけでなく、台湾が国際的により魅力的なビジネス環境になることにも繋がる点があると思いますので、ぜひご対応いただければありがたく思います。

**謝：**台北市日本工商会には毎年提言をいただいていますね。台湾政府もとても重視しています。これらの提言については真摯に受け止めており、非常に参考の価値があると考えています。台湾の国家発展委員会は、毎年この白書を拝受した後、省庁の枠組みを超えて個別の提言を受けての見直しや改正を進めています。すぐに解決できない問題もありますが、台湾の誠意を感じていただけていることと信じています。

## 駐日代表としてのご活動・今後の目標

**谷崎：**次に謝代表のこれまでのご活動について伺います。謝代表は地方間交流を大変重視し、日本

各地を訪問しておられるとのことですが、47 都道府県全て訪問されたのでしょうか。

謝：ほとんどの県を訪れました。この1年間で1番面白かったのは、新潟県の佐渡島です。今、台湾の文化部は海外に点在する台湾の芸術作品の里帰りを推進するプロジェクトを行っており、その一環で佐渡市を訪問しました。佐渡市には台湾製糖の社長を務めた山本悌二郎氏の胸像があるのですが、これは日本統治時代の台湾の芸術家・黄土水氏が制作したものなのです。佐渡島訪問の際には、渡辺竜五・佐渡市長にもお会いしました。胸像は台湾に「一時里帰り」し、国立台湾美術館が修復作業を行い、レプリカを作って収蔵し、オリジナルを佐渡市に返却する予定です。また、佐渡市内の真野公園にも山本悌二郎氏の銅像があります。あの銅像はもともと台湾に設置されたものだったのですが、蒋介石が日本に返却したという経緯がありました。今後これもお借りしてレプリカを作り、高雄橋頭糖廠に設置するよう進めたいと思います。

谷崎：そうだったんですね。

謝：他に印象に残っているのは、青森のねぶた祭です。一昨年、台湾は初めてねぶた祭に参加しました。海外のランタンが出展したのは初だそうです。西遊記の「猪八戒」がモデルになっている「天蓬元帥」というランタンが参加しました。

谷崎：私もかねてよりねぶた祭は行きたいと思っているのですが、昨年は中止になってしまいました。

謝：私は東北三大祭りは全て見に行きました。青森ねぶた祭、仙台七夕まつり、秋田竿燈まつりですね。

谷崎：凄いですね。東北のお祭りは本当に迫力がありますね。

謝：東北三大祭りは非常に魅力あるお祭りです。また、東京オリンピック・パラリンピックの台湾のホストタウンになった御殿場市も面白いです。

御殿場高原「時之栖」というリゾート施設では、一昨年台湾のランタンの職人を招いて12星座をキャラクター化したランタンを作り展示しました。そして、東京都杉並区高円寺の阿波踊りは2019年まで毎年台湾を訪問し、2019年には台北、新北、雲林、高雄の4カ所で公演していただきました。日台間では他にも様々なイベントやスポーツ等で交流が行われており、日本は本当に台湾の良い友人だと思っています。また、今後、民間の団体と協力し、台湾の近代化に貢献した歴史人物に関するドキュメンタリーの制作も進めていきたいと思っています。台湾は日本と共に歩んだ歴史があり、その中で多くの民間交流がありました。とりわけ、台湾の近代化においては、基隆港や高雄港の建設、鉄道や電気の整備、公衆衛生、蓬莱米の品種改良など、多くの分野で日本の人々の活躍や貢献があります。これを紹介することにより、日本の方々に台湾の歴史における日本との絆を知っていただければと期待しています。

谷崎：素晴らしい取り組みですね。多くの日本人が日本と台湾の歴史的な関わりを知ることは、より強固な日台関係を築くきっかけになると思います。ところで、謝代表は台湾から日本への輸出についてもプロモーションされると存じますが、今まさに話題になっているのはパイナップルですね。日本市場に売り込んだらいかがでしょうか。

謝：実はこの対談を行っている3月というのはパイナップルの収穫が始まったばかりの時期なのです。旬の4月になってから仕入れた方がパイナップルが大きく成長していて良いと思ったのですが、日本の皆さんは大変熱心で、既にスーパーで沢山注文してくださっています。

谷崎：日本のスーパーも必ず仕入れると思いますよ。

謝：バナナの時もやったのですが、私が提案したのはホストタウンと友好都市の学校給食で提供することです。ぜひ日本の子供たちに台湾パイナップル

プルの美味しさを知ってほしいと思います。

**谷崎**：台湾の果物は本当に美味しいですね。ポンカンも美味しかったです。

**謝**：ポンカンも瑞々しいですね。台湾のパイナップルは糖度が高く大変甘いです。そして体にもいいです。消化や免疫力の向上に効果があります。

**谷崎**：ぜひ台湾のパイナップルをますます日本に。

**謝**：ありがとうございます。

## 国際社会へのメッセージ

**谷崎**：最後に、謝代表の重要なお仕事の一つに、日本を含む国際社会に対して台湾をアピールすることがあると思いますが、先ほど謝代表がおっしゃられた中で私が非常に大事だと思ったことは、台湾が「価値を共有している」ということです。これは日本にとっても世界にとっても大切なことです。そしてもう一つが、台湾は民主主義的なアプローチに則って新型コロナウイルスの防疫に成功したということです。世界では多くの先進国が新型コロナウイルスを未だ防ぎきれていない状況ですが、他方で中国は結果的には抑え込みに成功したわけです。そして、韓国も台湾も成功しました。台湾は権威主義体制でないにも関わらず、感染状況をコントロールしたということです。民主主義体制の中で台湾が感染拡大を極めて有効に制御したということは、民主主義という価値観に対する台湾の多大な貢献であると思います。そしてこれはアフリカ等の多くの途上国にとっても大きな意味を有しています。そもそも台湾は経済的にも市場経済でもってこの何十年間成功してきました。そうした意味において、台湾というのは国際社会において意味のある前例を作っていると思います。

**謝**：そうですね。新型コロナウイルスについては、独裁的な体制でなくても封じ込めに成功できることを台湾は世界に示しました。もし成功しなければ、自由民主主義体制は駄目だと中国は大きく宣伝したでしょう。台湾が民主的に成功できたことを通じ

て民主社会の価値を証明したいと思っています。台湾は世界における民主主義の善良なパワーであり、国際社会の一員として、今後も引き続き、WHO、ICAO、UNFCCC、CPTPP等への参加を積極的に推進していきたいと思っています。また、米国や日本など理念の近い国々と協力パートナー関係を深めていくことを望んでいます。

**谷崎**：今蔡総統や謝代表ももちろんですが、特にオードリー・タン氏が日本で有名ですね。書店に行くと、オードリー・タン氏が表紙に写った本が山積みされています。

**謝**：オードリー・タン氏の存在は、台湾がいかに自由な環境であるのかということを示していると思います。これも世界にアピールできる台湾の強みの一つだと思います。例えば台湾では同性婚を認めています。台湾では進歩的なものだと思ったらすぐに実行します。原子力発電所の問題もそうですね。2025年までに脱原発と言ったのですが、実際には電力が足りるかという問題もありますけれども、しかし皆一度決めたらそれに向けて一生懸命にやるので、そういうことは台湾の政治の特徴かもしれません。

**谷崎**：それは素晴らしいことですね。日本はなかなかできません。

**謝**：日本はやっぱり慎重ですね、必ず100%成功するという自信がないとやらない。

**谷崎**：しかし、今は時間というファクターも必要になってきましたね。まさに今の感染症との闘いもそうです。日本もこういうところは変わっていないといけないかもしれません。さて、本日は長時間にわたってありがとうございました。最後に謝代表から「交流」の読者に対してメッセージをいただき、この会を終了したいと思います。

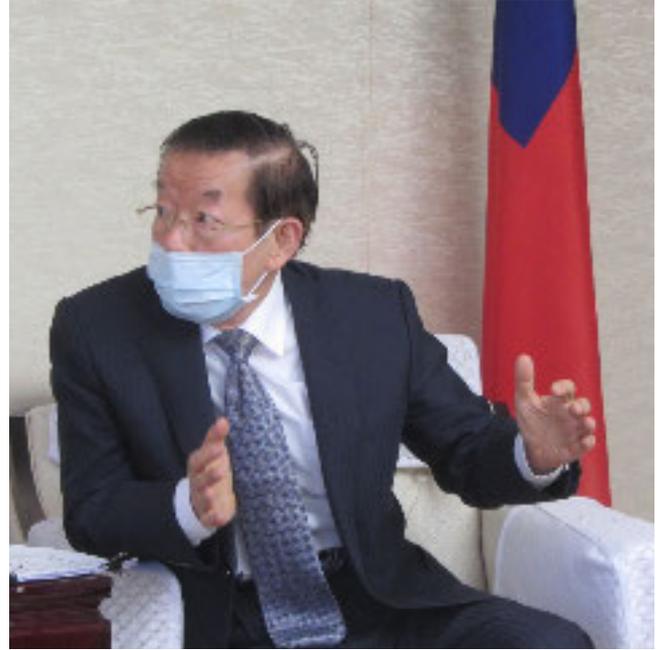
**謝**：台湾は信用できる責任あるパートナーです。台湾と日本は補完関係をうまく進め、さらに発展、Win-Winの関係を築いていくことができると信じています。

谷崎：全くもってそう思います。本日はありがとうございました。

謝：こちらこそ楽しかったです。ありがとうございました。



谷崎泰明理事長



謝長廷代表